東筑摩塩尻教育会長　様

塩尻東小学校
金井　亜希

令和６年度　県外視察報告書

○　視察テーマ

子どもたちに必要なチカラを「遊び」を通じて育んでいくことを目的にした施設 SORAI から、学校教育に生かせる環境づくりを学びたい。

視察先所在地　山形県鶴岡市
視察先機関名　KIDS DOME SORAI
（キッズドームソライ）

○　視察報告

１　SORAI 視察

（１）施設の概要と理念

KIDS DOME SORAI は、山形県庄内地方を拠点に、全国地方都市の課題解決型事業に取り組む（株）SHONAI が運営する全天候型の児童教育施設である。これからの時代に生きる子どもたちに必要なチカラを「遊び」を通じて育んでいくことを目的にし、本能のままに体を動かす巨大な屋内型遊戯施設「アソビバ」と、様々な素材や道具を使ってアートやものづくりができるアトリエ「ツクルバ」、創造力を掻き立てる本と出会えるライブラリを使って、子どもたちが自分の好きなものに没入し、成長していける環境創りを目指している。

「SORAI」は庄内藩の徂徠学（そらいがく）を由来とする。自主性を重んじた教育方針で、各自の天性に応じ長所を伸ばすことを主眼に、質実剛健な教育文化の風土を育む土壌と優れた人材の育成を目的にしていた。

（２）施設の具体

① アソビバ（体を動かす）

アソビバは、アスレチック要素の高い、ダイナミックな空間だった。思いのままに登ったり、転がったり、滑ったりしながら、何通りもの遊びにチャレンジできるのが特徴。ファミリースライドの裏側には、小さい子ども向けのスペースもあった。

視察に行った日は、夏休みということもあり大勢の子どもが訪れていた。入り口で靴を脱ぎ、さらに靴下を脱ぐ。アソビバは全体が無垢の木と滑りにくい樹脂の床で出来ていた。子どもは靴下を脱ぐと一斉に

走り出し遊び出す。保護者には見守る場所があり、多くの子どもは親から離れ、思いっきり自分のやりたい遊びに没入している姿があった。

② アソビバ（本を読む）

館内には 800 冊の本があり、「オトナもコドモ コドモもオトナ」をコンセプトに、子どもが読む本はこうあるべき・・・と決めつけない本選びが仕掛けられていた。アソビバには２箇所、ライブラリスペースがあり、一つめは、通称『秘密基地スペース』。土管やハンモックがあり、ゆったりくつろぎながら読書ができた。もう一つは、通称『洞窟スペース』。未就学児を対象にした読み聞かせの本が置いてあった。

『秘密基地スペース』は奥まった場所にあり、揺れが心地よく読書をしたくなる環境だった。また、『洞窟スペース』は、その中に入りたいから読書をする子どもも多く、子どもの特性に合わせた環境を提供することで読書の世界へ誘う役割があることを感じた。

③ ツクルバ（ものをつくる）

ツクルバは常時 1,000 種類の素材と 200 種類の道具が揃う夢のアトリエ空間。 工作、アート、クラフト、アクセサリー作り、木工、3D プリンターなど、その日の気分で自由に好きなものを選んでものづくりが楽しめる。カラフルな材料が美しく並んでいて、見ているだけで楽しくなる。並べられている材料の全てを自由に使うことが出来る最高の環境だった。子どもだけでなく大人も作ることを楽しみ、空間全体がアトリエのように創作意欲で溢れていた。

2　視察の感想

（1） 子どもを連れて行った。小学生 6 年生男子（A）、小学 6 年生女子（B）、小学 3 年生男子（C）。三者三様で面白かった。

A：アソビバとツクルバの両方を楽しみたいと言って、時間を半分に分けていた。ツクルバの 3 D プリンターの体験を楽しみにしていて、プログラミングをしてツリー等を作っていた。

B：ツクルバだけに居た。缶バッチを作る（無料）ことを 1 時間続けていた。20 個ほど作っていたが、全部違うデザインだった。自分で模様を描いたり、型抜きの模様をちりばめたりしてい

た。

C：全ての時間をアソビバで過ごした。何度も坂道をのぼり、ロープをよじ登り、汗びっしょりになるまで遊び続けていた。

本能のままに遊び続ける３人の子どもを見ていると、アソビバ、ツクルバの環境の中で自己決定の瞬間が何度もあった。その連続の中で「こうしてみよう」「やってみよう」と次々にチャレンジを繰り返していた。自分もツクルバで、イベントで使う仲間の名札を作った。キラキラの紙を選び、試行錯誤しながらヒラヒラのリボンをつけてみた。SORAI の世界でつくることを存分に楽しめた。

学校教育の中でこれだけの場や材を用意することは難しさはある。しかし、発想を柔軟にして、環境作りから楽しむことができると思った。環境で子どもの意識は変わる。いつもと違う環境が一つあるだけで子どもは前向きに活動できると思った。

（２） SORAI は山形県庄内平野の中央に位置する。突然、農村風景の中に現れるドーム型の建物は前衛的な雰囲気があり異質に見える。何故このような場があるのか歴史を調べてみた。

庄内地方には、文化２年(1805) に創設した学校「致道館」があり、徂徠学を藩学としていた。徂徠学を学んだ人材が藩の指導的な立場にあったことが、藩学とした要因であるといわれている。明治６年(1873) の廃校までのおよそ 70 年間、致道館は荻生徂徠(おぎゅうそらい)の学風を伝承し、武士道を体得し互いに切磋琢磨して多くの人材を輩出した。庄内藩における徂徠学の元祖は水野元朗(みずのげんろう)と疋田進修(ひきたしんしゅう)であり、徂徠の没後に太宰春台にも学んだ元朗は、庄内藩学の基礎をつくった。※信濃の国の歌詞に出てくる“太宰春台”先生とのつながりがあることに驚いた。

今でも、致道館は致道博物館として地域に根付き、その思想は地域に生きていることを感じた。そういった土壌がある土地だから SORAI が出来たのだと思う。

自主性を重んじた教育方針で、各自の天性に応じ長所を伸ばすことを主眼にした徂徠学。生活科、総合的な学習の時間の充実をライフワークにしている自分にとって、教育文化の風土やその土壌に触れられたことは貴重な経験になった。